

# Alert 20号

反天皇制運動

[通巻 402 号]

2018 年  
2 月 6 日発行

第 20 期・反天皇制運動連絡会

## 今月の Alert

● 天皇「代替わり」・「明治150年」を撃つ反天皇制運動の拡大をめざして——\*2

反天ジャーナル ● ——井上森、つるたまさひで、映女\*3

状況批評 ● カラッポのダンスと聖徳の魔法——平井玄\*4

書評 ● 「明治日本の産業革命遺産」と強制労働〜日韓市民による世界遺産ガイドブック

——蝙蝠\*7

追悼・福富節男さん ● 反天皇制運動の中での交流——天野恵一\*8

太田昌国のみたび夢は夜ひらく(93)

● ソ連の北方四島占領作戦は、米国の援助の下で実施されたという「発見」

——太田昌国\*10

野次馬日誌\*11 集会の真相\*13 学習会報告\*15

反天日誌\*16 集会情報\*16

学校教育の刷り込みによって、明治維新はアジアで唯一近代化に成功した革命（変革）であったと、ほとんどの国民、どこかで世界中で信じられている。「近代」になったかどうかは置くとして、明治維新で人々は幸せになったのか。

現在の労働組合の前身である友愛会の機関紙『友愛新報』の第3号（1913年1月）に小川滋次郎（東京帝大）が「労働神聖論」を書いている。「日本は果して一等国？」という問題意識から、他の一等国とくらべて、外国貿易高や貯金額がはるかに低い、自殺者11000人、死産者154000人、犯罪者80000人（いずれも1年）は数倍というデータを示している。全体の趣旨は、これでは他の一等国に対抗できないから、まず労働者が「労働は神聖である」ということを自覚して奮闘すべしということなのだが、わたしが知りたいのは、自殺者、死産者、犯罪者の維新前の数字である。

正確な統計はもちろん存在しないはずだが、貧富の差が拡大したのは、西南戦争用の武器調達のために人為的に起したインフレを解消しようとした松方デフレ政策によって地主・小作制が成立したことで、小作人の子もたちを極端な低賃金で雇用して実現した産業革命、資本制である。江戸時代の貧農論の克服が提起されてから久しいが、幕末に日本を訪れた西洋人もみな、「日本の農民は質素ではあるが、困窮はしていない」と書いている。大都市にスラムが形成されたのも日清・日露戦争期であった。

人々の最大の不幸は、天皇のために、お国のために、人殺しにされ、また殺されたことであろう。（千本秀樹）



250 円

● 定期購読をお願いします（送料共年間4000円）

● 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: [hanten@ten-no.net](mailto:hanten@ten-no.net)

今月の  
**Alert**

## 天皇「代替わり」・「明治150年」を撃つ 反天皇制運動の拡大をめざして



今年に入って、天皇「代替わり」に関する準備が着実に進んでいる。

一月九日の閣議で設置が決まった「天皇陛下の御即位及び皇太子殿下の御即位に伴う式典準備委員会」（委員長＝菅官房長官）は、その日のうちに初会合を開き、三月中旬をめどに基本方針を取りまとめることを決めた。

式典準備委員会では、「平成の即位の儀式を基本的に踏襲すべきだ」という意見のもとで、即位儀式のうち、「剣璽（けんじ）等承継の儀」「即位後朝見の儀」「即位礼正殿の儀」「祝賀御列の儀」「饗宴の儀」の五つを国事行為とし、「大嘗祭」については国事行為とはしないが、公費支出をするという方針が示された。

「剣璽等承継の儀」は「三種の神器」などの引き継ぎ儀式であり、「即位後朝見の儀」は、即位後初めて天皇として「国民代表」に「おことば」を述べる儀式である。純然たる皇室神道の儀式である大嘗祭も含めて、憲法の「政教分離」「国民主権」原則に対する重大な侵害であることは疑いない。

さらに政府は、皇太子・徳仁が即位する来年五月一日を「この年限りの祝日とする」方向で検討に入ったという。「昭和の日」にはじまる「一〇連休」があけたときには、「新しい御代」という祝賀ムードの演出ではないのか。五月一日のメーデーも天皇の記念日となってしまうのだ。

政府は、退位の儀式を四月三〇日、即位の儀式を五月一日に分けておこなう方針である。天皇が自らの意思で皇位を譲る「譲位」の色彩を帯び、天皇の国政関与を禁じた憲法に触れることがないようにするため、と説明されている。

これ自体が欺瞞的なものだが、伝統主義的右派は、それでは天皇の「空位」が生じると批判している。神社新報社が設立した「時の流れ研究会」は一月二四日に「御譲位の儀と御即位（踐祚）の儀は、同日・同じ場所で行き続き行はれ、『剣璽』が承継されることを望む」「皇位継承の儀式は、憲法にも定められる皇位の重みから、国の重儀（天皇の国事行為、国の儀式）として執行されることを望む」などとする要望書を出した。彼らにとって、「三種の神器」は皇位の象徴であるので、その「引き継ぎ」なき「譲位」などありえないのだ。

こうしたくだらない議論がまじめになされること自体に、天皇制という国家の装置の核として、実は明確に「国家神道」が存在し続けていることが示されている。それは単なる「神道儀式」であるから政教分離に違反するといった話ではないのだ。これら「代替わり」儀式を通じて、国家の祭祀としての国家神道が現前するのである。それが日本の「文化と伝統」という言いぐさで肯定されることも、神社非宗教論を掲げた国家神道と同じである。

そして、この「代替わり」儀式の準備と並行して、各省庁の連絡調整機関である「明治一五〇年」関連施策各府省庁連絡会議のもとで、「明治一五〇年」の祝賀事業が進められている（昨年末現在で、国主催のものが一五二件、地方公共団体レベルのものが二〇〇八件）。現時点では、開催も含めて確定してはいないが、メインの儀式として、当然、秋には政府主催の記念式典が想定されているはずである。

明治一五〇年の施策に関する政府の文書は、「明治の精神に学び、更に飛躍する国へ向けて」

と称して、「明治期に生きた人びとのよりどころとなった精神を捉えることにより、日本の技術や文化といった強みを再認識し、現代に活かすことで、日本の更なる発展を目指す基礎とする」と述べている。

政府広報で「明治ノベーション・メイジン」なるキャラクター（？）が登場しているように、それは安倍や財界が求める流行の価値観を日本近代の出发点に投影した、「ニッポンスゴイ」論である。「一五〇年」を、今に続く一連の発展を遂げた近代化の歴史ととらえ、それをもたらし精神文化の称揚とともに、まるごと賛美・肯定しようとするものだ。

しかし、現実の明治＝近代日本の一五〇年とは、すなわち天皇制国家の一五〇年である。前半はアジア侵略・植民地支配と戦争に彩られ、また、後半は象徴天皇制のもとで侵略戦争と植民地支配から目を背けてきた歴史だ。「一五〇年」はそのように無条件に賛美されるような歴史では決してないのだ。

私たちは、この「明治一五〇年」が、明仁天皇「代替わり」の前哨戦として行われるイベントであるにとらえ、近代天皇制の歴史総体を批判していくという立場から、今年一年間の反天皇制闘争を開始していきたい。

2・11反「紀元節」行動はその第一歩である。ぜひ多くの参加を。そしてまた、昨年「終わりにしよう天皇制！11・26集会・デモ」に取り組んだ首都圏の反天皇制運動の枠で、この二月から「元号はいらない署名運動」を呼びかけることになった。次号では、具体的な報告もできると思う。ぜひ、協力して、反天皇制の声を大きくあげていこう。

（北野登）

## 師走に読む和巳

「革命百年」に駆け込みで、師走に何冊か本を読んだ。その中の一冊が、高橋和巳の『日本の悪霊』だった。二〇年近く前の、学生時代ぶりの再読である。和巳テイストの、ヒロイズムや挫折といったお決まりのモチーフは相変わらずキモかった。しかしこちらも年を重ねて、新たに発見したことがある。

あらずじは、五〇年代の武装共産党の闘争で殺人を犯した男と、特攻隊帰りの刑事の邂逅である。全部省略して結論から言えば、「革命」と「戦争」という大義の前に挫折した男二人が、「挫折すら忘却せよ」と迫る世間知の中で生きることの苦しみを分かち合うというモチーフである。そこで気付く。これもまた仲間殺しの話なのだ、と。追う方も追われる方も、中心は空の無責任体系の中でもつれ合っていることを諦念と共に受け入れ、読者もそこに滅びのカタルシスを感じるのだ、と。

和巳が死んで四七年。ここは越えな、と思う。職場や生活の中で妥協を重ねつつも、一つでも陣地を広げようとしてきた無数無名の同志達のドラマは、滅びのカタルシスを無力化する。和巳が壮大に暗示しつつ、小説の最後までついに名指せなかった「天皇」の名も、いつしか私たちは名指せるようになった。そうだ、時代はこういう風に進むのだ。

(井上森 立川テント村)

## 知的障害の人の自立生活について

津久井やまゆり園での障害者の多量殺傷事件から一年半。一九人という死者は三菱重工爆破事件よりも地下鉄サリン事件よりも多い。そして、容疑者のうはいまでも、意思疎通のできない（彼にはできなかったという話だが）障害者を殺した自分の行動の正しさを主張している。

精神病院に入院させられている人の多さにおいて、日本が飛びぬけていることは知られているが、知的障害者においてもそれは似ていて、四〇万人の知的障害者のうち一〇万人が入所施設。そしておそらく、残りの三〇万の大半は親との同居。

その施設の多くは「別世界」のような場所にある。なぜ、知的障害者の多くは成人しても親の家を出て、自分が住みたい場所で暮らすことができないことがあたり前とされているのか。ぼくが住んでいる地域でも、主に母親が、ぎりぎりまで知的障害のある子どもの面倒を見て、それが出来なくなったら入所施設という例がいまでも少なくない。重い知的障害者が介助者を入れて地域で生活するという取り組みはまだまだ知られていない。そして、そんな暮らしを支えることができる機関もまた少ない。そんな暮らしを知ってもらおうというキャンペーンを始めた。「知的障害者の自立生活声明」で検索してほしい。(https://iituseikatu.jimdo.com/ (こなたまやひで))

## 蘇るナチスの断種法

二〇一八年一月三〇日、宮城県の女性が、旧優生保護法の下、一五歳の時に「知的障害」を理由に不妊手術を強制されたのは、個人の尊厳や自己決定権を保障する憲法に違反するとして、国に損害賠償を求める訴えを仙台地裁に起こしました。旧優生保護法の規定そのものが憲法違反であったという主張です。

旧優生保護法（一九四八年から九六年まで）下で強制不妊手術をされたのは、全国で二万六四七五人。宮城県で強制手術の記録が残っている八五九人（一九六三年～八一年）中最年少が九歳、半数以上が未成年、審査の経緯も不鮮明。かねて国連の委員会や女性差別撤廃委員会は、被害者の救済措置を勧告してきました。同様の問題が浮上したドイツやスウェーデンでは被害者に謝罪と補償を行っています。旧優生保護法の問題点は、優生思想に基づいたナチスの断種法をとりいれた「国民優生法」が前身であること。「不良な子孫の出生防止」を目的とし、精神障害や知的障害、ハンセン病などを理由とした不妊手術を認めていました。旧優生保護法は、戦後の人口増に対応するためとされていますが、ナチスにない戦中「産めよ殖やせよ」と号令をかけたながら、戦後も「不良な子孫の出生防止」に励んでいたのです。一六年の相模原の障害者殺傷事件をみても優生思想は消えていません。国が率先して優生政策をとってきたのだから。

(映女)

# 状況批評

思想・状況批評

## カラツポのダンスと聖徳の魔法

平井玄（非正規批評家）

### ■魔法の本

一年前に出た片山杜秀 島蘭進『近代天皇論——「神聖」か、「象徴」か』をようやく読んだ。「今のところ最強の天皇（肯定）論じゃないかな？」という若い人たちの意見につられて、スラッと読了してしまった。二人とも語り口は円やかで、少なくともアキヒト以前の話題には歴史的な裏付けもある。

左派やリベラルは「最新型」と思い込んでいるが、実は昔ながらの王制転向論にはもうゲップが出る。幕末以前の江戸を理想化するか八世紀まで遡るかはいろいろだが、それらと違って、この本は「昭和と平成」天皇家二代による「作品」としての「戦後象徴制」を浮き彫りにしているのである。それが「最強」って意味かなと思う。片山はこんな言い方をしている。司馬遼太郎の大正デモクラシー以降におかしくなったという「昭和の魔法」に対して、右派はアメリカに従属する「戦後の魔法」をいうが――。

「でも国の正気なんてあるのでしょうか。私は国というのは何かの「魔法」をかけることでいつの時代にもできているものと思っているのですが」（p.21）。

泣かせることをいうね。私も「国の正気」なんてないと思う。とはいえ、なかなか巧妙だ。この言葉は「魔法」の肯定と否定、その両義的な意味のあわいで成り立っているのである。つまり彼らは象徴天皇時代の平和と民主主義という「戦後の魔法」を積極的に肯定する。魔法だから虚妄とわかってるよ。わかつちやいるけど、あえて「神聖派」に対し

て肯定したいと言うわけだ。江戸にも古代にも先祖帰りしない。モダンな「作品」だ。でも、それこそが新たな、今こそ必要とされる神聖化なんじゃないの？

片山という人には、クラシック音楽のシャープな批評家として前から書くものにチラチラと触れてきた。優雅でリベラルな顔をした新王党派という立ち位置にはすでに長い伝統がある。例えばモーツァルトを語る小林秀雄。そして音楽家というヤツは「魔法使い」なのだ。「中庸のおじさん」内田樹なんかよりヤバイよ。たしかに本の三分の二ほど「天皇という政治」をめぐる冷静な分析が続いた後、二人はいきなり煙に巻かれるのである。合理的説明から一転、想像されたアキヒトの「人となり」に寄り添うという、不可解な転調が訪れる。

片山の語りは鮮やかなマジシャンのそれである。島蘭も幻に酔いかけたように読める。ところが「王」というのは政治的な体と自然な体が折り重なった想像上の怪物でしょ。そのダブルイメージを腑分けしたうえで、さらにもう一度合体して、そこから生まれるおどろおどろしい大魔術を解き明かすのが学知の仕事では、と思うのだが。

さて、ちよつと頭の隅に残ったのは「聖徳」という言葉である。神宮外苑に「聖徳記念絵画館」という石造りの建築がある。あの丸いドームがウィーン分離派もどきというのは後知恵だ。子どものころ外苑に遊びに行くと「あれはなに？」と思っていた。その「聖徳」は、福祉制度がない「明治」に救貧院や恩賜済生会や慈恵会のような病院、そして「国見」（巡幸）で貧乏人に慈愛を示すことがもつぱらの意味だという。あのドームの下には、そういう慈しみ深い「大帝」の姿を描いた絵ばかりが収め



られているらしい。

外苑のグラウンドで真冬に半ズボンで野球に夢中だったガキどもはそんなことは知らなかった。この「聖徳」が福祉が消えて再びピンボーがあられ出る時代に甦るといのである。

## ■タンスの無意識

というわけで、このところ「タンス」のことを考えている。

どういうわけなのか？ 総桐の筆筒ではない。「タンス預金」のことだ。いくらなんでも今どき引き出しの奥にこっそりと現ナマを隠す人はいないだろうから、利子がほぼゼロの銀行預金である。これがなんと国内に一八〇〇兆円もあるというのだ（二〇一七年三月の日銀統計）。この数字には金持ちの口座も含まれているから、全額に「タンス預金」という形容は似合わない。それでもチリが積もった小口の口座がけっこうあるだろう。そして庶民の先祖代々からの教えは「タンス預金に手をつけるな」に決まっているのだ。

この古臭い言い伝えが頑強である。三種あるNISA口座（個人の株式投資一二〇万円／年まで非課税など）の開設数も稼働率も思ったほど伸びない。「一億総株主化！」なんてハッパをかけられても踊る人は多くないのである。「国家オレオレ詐欺か」と内心は思っている。マイナバーの縛り、利息ゼロとマイナス金利、年金消滅など、「びた一文も出さない」という人々の不安な岩盤はテコでも動かない。

「憲法の無意識」というキャッチをひねり出した知識人もいたが、戦後が蓄積したという意味ではこういう「タンスの無意識」もあるだろう。事実、国債一〇〇〇兆円という「国家破産」直前の崖っぷちをどうにか持ちこたえているのは、高度成長やバブルの時代に蓄えられたこの小口預金の誘惑らしい。一部のエコノミストは言う。いざとなれば、日銀を国有化してタンスの中身を吸い上げればいいんじゃないか。長期国債保有者のうち外国籍は5%しかないから――。

「すべては身内の借金」という根も葉もない安心感だ。だからずずずと量的緩和とマイナス金利を続けるしかないという。戯言である。しかし「そのうちなんとかなるだろう」という内心の思いは土建屋業界の人間たちだけではないんだな、これが。

「憲法の無意識」は実はこういう「タンスの無意識」に支えられている。そこを見たくないから江戸の幻に逃げ込んでしまおう。いわば、憲法一条も九条も、二二条や二五条もシャッター街の家の中、そのタンスの引き出しにしまわれているのである。ボロボロになった土地の権利書のように。これが、国会前になんか行かない、投票にも行かない庶民たちの「だんまり」の中身だろう。

## ■聖徳マジック

ところがだ。そうは問屋が卸さない。

年金の減額や給付の先延ばしは言うに及ばず、シャッター街への課税強化法案が今年にも上程されようとしているのである。固定資産税の減免措置を解除して六倍にしようという「地方活性化」の素晴らしいプランである。閉めた店舗を貸さず売らず、ひたすらタンスにしがみつく人たちのむりやり引き剥がそうというのだ。

だけど、と誰でも考えつく。地方の町角には人も犬の糞さえ目につかない。地方の町を歩く「鶴瓶の家族に乾杯」のようなテレビ番組はそれが映らないように苦労しているという。まあ映ってるけどね。自治体は人口減少地を放置する方向に向かっている。税收激減でとても支えられないからだ。こういう地域ごと蒸発する趨勢の中ではどんな活性化も、まして文化開発的な「ジェントリフィケーション」も成り立つわけがない。土建屋情報によればオリビック需要はとくに終わりで、リニア新幹線が次の美味しいエサだという。ヨダレが出る。しかし当然、リニアは地下を直線でぶっ飛ぶだけ。大規模開発など二〇世紀の産業遺産から産業廃棄物になった。地上に残されるのは茫々たる無人地帯。要する

にシャッター街の住人には税金だけが残ってしまうのである。田舎だけではない。東京都心部以外はみなそうなる。

福祉なき非正規雇のセーフティネットは「親のタンス預金、親の年金、親の家」だった。東京バブルが終わり親たちが死んで、これがすべて消滅する。富田克也監督の『国道二〇号線』以来、ずいぶん地方破滅ドラマを観たが、すべてハンパ。それでもタンスの中身は日々刻々とカラッポに近づく。残酷なのは全世代フリーター化である。今や派遣される先も高齢化しているから七〇歳でもOKである。ある時はがん患者三人で、ある時は二人ものチームを指揮する自分がいい例だ。非正規問題が世代間抗争にすり替えられたのは遠い昔のファンタジーなのだ。

そこで「聖徳」の登場というわけだが、そんなものが何の役に立つのか？

実証史学では存在しないに等しい「聖徳太子」が偶像化されたのは明治の聖徳時代でしょう。そういう「聖徳の魔法」を知ってか知らずか、呆れるほど多くの人たちが来るべき「上皇」さまになびいていく。連中のタンスはカラじゃないからだ。先代は戦争責任を「文学」と言ったが、まさに言葉操る夫婦なのである。では「文学」は魔法なのかって？

こいつは難しい。タンスも文字もドロドロに溶かして、大竹伸朗も逃げ出す怪物を創り出さなくちゃ。やっぱり「悪魔払い」だと言っておこう。

## ■魔術からの逃走

どんな「魔法」でも喰えるわけがない。だからどうにかして逃げ道を探すのである。

そのひとつが「メルカリ」というフリマアプリの急成長である。つまりネット上のフリーマーケットのことだ。もう使わないバッグとか、着なくなった衣類を写真に撮ってサイトにアップし、買いたい人を企業が媒介して直接やり取りする。YAHOO!はオークションだが、こちらは個人の中古専門で定価以上の売買は禁止である。メルカリってのはラ

テン語の「商い」だ。手軽と安心を売りものに、アメリカやイギリスにも展開しはじめた六本木ヒルズ企業である。去年一二月の時点で国内では四〇〇万ダウンロードを超えた——とまあ、IT業界はいう。

面白いのは現ナマが出品されたこと。一万円札に一万三五〇〇円の値をつける。つまり、ヤバイ手でつかんだ番号登録済みのピン札を別の万札にすり替えるのだ。その手数料が三五〇〇円とはねー。マネーロンダリングである。ただちに削除されたが、「ばったもん」も出る。ネット香具師みたいなもの。まあ「電脳闇市」かな。

こういう中古リユース市場がネットで巨大化するのには、資本主義が縮小する始まりになるかもしれない。売り回され使い回されるうちに付加どころか商品価値が減少していくからだ。生産システムはとうに国際化した、消費はグローバルに縮小再生産していく。

けっこうではないか。もちろん、シミつきの上着やコートをタダ同然で買い集め、京都の老舗染物屋で真っ黒に染めてアート系高付加価値商品に仕立てるなど、企業もなんとか延命しようと懸命だ。もともとフリーターは人間のリユースである。女も男もボロ布になるまで使い回される。それでも人口が減る縮小再生産なのだ。いずれメルカリに人が出品される日が来る。オレはいくらで売れるんだろう？ もう値がつかないね。

某グローバル戦略研究所の主幹は「今なら中国の貧困層を追いつめてもまだ耐える」とアケスケなことを言う（『日経ビジネス online』）。ここには「国内の」という含みが隠されているのだ。「聖徳の魔法」にかかれても一銭にもならない。電脳闇市じゃなくても、聖徳の幻術から逃げる術は意外な道ばたに転がっているだろう。それを探そうぜ。



## 「明治日本の産業革命遺産」と強制労働―日韓市民による世界遺産ガイドブック

編 蝠

「世界遺産」を冠にする広報やメディアの報道・番組を目にすることが多くなった。特にテレビ番組では、ほとんどがアイデアも表現も一〇年一日のけたたましいシロモノばかりで、できるだけ遠ざけているのだが、「世界遺産」を紹介するという体のものはそれでも比較のおとなしめなつくりになっていることが多く、ふと流し見していることもある。

国連ユネスコは、その活動に求心力を持たせるために、この「世界遺産」の選定を活用してきた。確かに、ユネスコ憲章にもあるように、「文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは人間の尊厳に欠くことのできないもの」として、「文化遺産」「自然遺産」「複合遺産」を共同で保存していく活動というものは意味があるだろう。とりわけ「近代化」が世界大となる中で、経済活動や文化衝突によって多数のものが「遺産」とさせられてきた。なかでも植民地化や資本主義化を爆発的に進めた国家や集団は、そのしばしば犯罪でしかなかった活動によって喪われた何くれに對して、重大な責任を持っており、その保存や意味づけを行なっていくべきだと思う。文化や「文化財」の「保護」は、それを踏みにじってきた歴史から考えるならば、欺瞞そのものだといしかないが、それでも、その固有の価値を確立するための努力や体制は、政治や経済活動その他による蹂躪を少しでも許さないために、怠ってはならないものだ。

しかし、近年になって、日本政府やその外郭団

体、利権集団によって推進されている「世界遺産」採択活動は、対象の選択も恣意的きわまり、そのほとんどがおぞましいものでしかない。ちなみに、民間において「世界遺産」申請に圧力をかける中心的存在は、かの日本財団である。記憶に新しいのは記紀を根拠とする宗像三女神を祀った神社や島嶼を「神宿る島」としたものが、このパンフレットが批判している「明治日本の産業革命遺産」もまた、その典型的なものであるだろう。この件では、前川前文科事務次官によって、文科省の審議会に安倍政権が介入して、木曾、和泉、加藤などその利権グループを「有識者会議」に押し込んだ経過が明らかにされている。制定の過程では「一般財団法人産業遺産国民会議」なるものも立ち上げられた。

「明治日本の産業革命遺産」では、九州と安倍の地元の山口県の施設を主として登録された。産業革命に関連が深いとは言えない「松下村塾」や萩市城下町などもしつかり盛り込まれている。しかし、この登録における問題は、それだけではない。

「明治日本の産業革命」は、それ自体が正の「価値」づけをされるようなものではなかった。資本形成期の資本主義は、本質的に労働収奪的なものとして展開された。明治期の大日本帝国においては、「資本主義」の展開は、まさに侵略政策のただなかでその実体化として進められた。国内的には産業労働者として農民層を解体し、対外的にはそれに加えて植民地化された朝鮮などからの労働者の動員と強制労働がなされた。こうした経過は「世界遺産」

としては後景に伏せられ、産業化の「栄光」とそれを推進した企業や個人の顕彰ばかりがなされている。登録時には、「戦時の朝鮮半島出身者の徴用は強制労働ではない」とまで主張している。強制労働や暴力についての指摘には、産経新聞やネット右翼などまで総動員して、これをもみ消そうとしているのだ。

このパンフレットは、90ページほどに過ぎない小さなものだが、文章だけではなく図版を多数盛り込んで、さまざまな方面からこの問題を浮き彫りにしている。これまで韓国の側から歴史の発掘と資料の収集・出版に取り組んでいた「民族問題研究所」と、日本の側でこうした活動を展開してきた「強制動員真相究明ネットワーク」の共同で制作されたもので、この問題を今後も究明していくという意思を明らかにしているものだ。読みやすく、しかも内容は細かくて、テキストとしても優れている。ウェブ上でも公開されているが、ぜひとも購入して活動を支援していきたい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

強制動員真相究明ネットワーク／民族問題研究所

〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1

(財) 神戸学生青年センター内

<http://ksyc.jp/sinsou-net/sekaisann-g-book.pdf>

送料込み五〇〇円

郵便振替(00930-9-297182 真相究明ネット)

「老衰」のため」という福富節男さんの死去の連絡は、「日本はこれでもいいのか市民連合」から、私たち「反天皇制運動連絡会」に移ってきて熱心に活動し続けたという、めずらしい経歴の事務局メンバーであった八坂康司から来た。「一月一日」に亡くなられたと、福富さんと、運動上の付き合ひの長かった八坂はつたえてくれた。九八歳の誕生日をこえた後の死であった。

八坂の電話の後、福富さんとともに動きまわった日々の断片的シーンが、いくつもいくつも私の頭の中に浮かんできた。本当にすさまじい数の会議をデモを、大小さまざまな集会をともにつくってきたのだ。

最後のデモのシーンは、良く覚えている。糖尿病の悪化で、ほとんど歩くことができなくなっていた私は、デモの宣伝カーに乗り込んでいた。デモの出発地点、いつもの通り右翼の暴力的介入で大混乱、殴りかかりつつ「非国民死ネー」などという罵声をあげる暴力の渦の中を、福富さんがゆっくりと歩いて来たのである。車の窓の外から、私に何か手渡そうとする。私は危険を感じて、いそいで窓をおろして対応すると、「勉さんの食事管理のためのノートと血糖測定機だ。気をつけて生きてくれ」と短くつたえて、福富さんはスタスタと歩き去っていった。そのノートは家に帰ってどういふものか理解できたのだが、糖尿病の大先輩である、渡辺勉さんの日々の三食のメニューをこまかく書き込んだものであった。福富さんが、わざわざ彼の長い友人の勉さんのところから持参してくれたのである。私は、九十歳を超えていたであろう福富さんが、こんな危険な場所から、無事にひきあげられるだろうか、ハラハラしながら、

ら、その背中を見送ったことを、昨日のことにように覚えている。おそらくそれは、「デモ暮らし」の人生を自認していた福富さんの最後のデモ参加だったのではないかと、いと思う。

もう一つの思い出のシーンは、一九八八年の四月二十九日・三十日に、のべ二千人をこえる参加者で持たれた昭和天皇の「代替りの政治」プロセスでの、都内大結集の第一派の準備の時間だったと思う。私たちは、いくつもの分科会をつくり、ここで広く反天皇制の声を結集させなければ、次のステップはないという思いで必死の努力、自分たちの力量をまったく超えたことの実現のための

## 追悼・福富節男さん

### 反天皇制運動の中での交流

天野恵一

努力をかさねていた。「共同行動」の事務局の会議（作業）はほぼ連日深夜まで続いていた。その渦中のある日の事である。場所はハッキリしないが、深夜に福富さんと私は奇妙に大きな電話ボックス（どこか人のいない高速道路の中にでもあるようなそれ）の前にいる、そして福富さんが海外電話のためのそのBOXに入り、電話をし出してくる。そして「残念、ダメだった。ドイツからは帰国しているんだが、その翌日のスケジュール、無理はお願いできなかった」と、本当に残念そうに告げる。「しかたないですね」と答えながら、私は、その時この局面で、すさまじい数の講師への発言

依頼を引き受けて、人には言えないが（本当はこういう気配りをはりめぐらすような作業は苦手な私が）ヘトヘトになっていたのを見かねて、加藤周一さんへの依頼を（福富さんの提案だったということもあったか）自ら、引き受け、深夜までつきあってくれた時のことである。数学者であった福富さんは、運動を引っぱっていくような方針を出し、主役で活動するタイプではまったくなかった。しかし、運動が力になるように、どう人々に広くつたわる主張（スタイル）をつくりだすかという点については、常に誰よりも運動の中で考えていた人だったと、いと思う。三十歳近く年齢が上の福富さんは、このように長い間いつも運動「現場」の苦勞を、ともにしている特別な（友人）でありつづけた。

集まりを広げるべく、私たちではとても思いつかない（ただし交渉しだいでは出てきてもおかしくない）加藤周一さんの名をあげ、直接交渉までしてくれた彼と私は、深夜の車道を、「代わりは誰がいいかな？」などと話しながらトボトボと歩き続けた。この深夜のトボトボ歩きは、結果的には、思いもかけぬ大結集をうみだしたこの（反天フォーラム）の時の忘れられない思い出の一コマである。

私たちの反天皇制の「共同行動」のリーダー層は、セクトであれノンセクト（あるいは党派をよめた人）であれ、ほぼ大学で全共闘運動の体験者であった（もちろん、それ以外の人も少なくなかったが）。共通していたのはひたすらソフトな「市民（主義）運動」への、強い反発であったと思う（これも、またそうでない人もいたが）。だから、あのような大衆的な広がりをつくりだす力量はな



かったと思う。猪突猛進の（感情的急進主義者）の群れだったのだから。福富さんは、その群れの内側から、私たちの偏狭さを、とりはらうべく、したたかに動き続けた。私個人でいえば、彼が「ベ平連」などの活動を通して知っていた、実に多様でユニークな人々と交流する機会を、数かぎりなく作ってくれた。人と人の出会いは、自然に人を変える（自己相対化の契機になる〈出会い〉）というものは、まちがいない（ある）。福富さんと歩いた運動プロセスは、そういうことだったのだ（それが徹底的に少数派を約束された反天皇制運動を思いもかけず大衆的に拡大する主体的契機となったのだ）。福富さんは単なる「市民運動」者ではなかった。東京農工大の教師をしながら、自分が処分された日本大学の全共闘運動に加担する活動（日大闘争救援会）の経験もあり、「全共闘」の急進主義をハラハラした気分で見まもるというポジションは馴れていたのだろう。私たち硬直した運動のスタイルをもみほぐし続けてくれたのだ。楽しくラッキーな交流であった（もちろん、彼に反発し続けた党派のリーダーなどいたのだが）。

私は、こういう認識を、共に運動を歩き続けていた時点で、ハッキリと持っていたわけではまるでない。後の時間で運動をふりかえり、そうだったんだナと強く思いだしてきたのである。

ただ「運刻魔」であった福富さんは（これは私はあまり人のことを言えた義理ではないが）、やはりひどくゆつくりと変化する人でもあった。私たちの運動の中で彼も実は大きく変わったのだ。

このことを示す、断片的シーンを、最後にもう一つだけ紹介する。私（と松井隆志）のあるインタビューに答えて、彼は、天皇制の問題や自分

の天皇の軍隊の体験について正面から考えだしたのは、「天野くんたちの反天皇制運動を通してだ」とかつて証言している。自分は、軍人だった戦中も天皇信仰なんかなかったし、戦後は、どうでもいいものと考えてきた時間が長かった、軍隊体験なんて、ふりかえりたくもない嫌なものでのみあり続けた、とその時語っていた。運動を生きた後の彼の天皇制認識の結論はどういうものであったのか。それをストレートに示す発言が残されている。「『日の丸・君が代』の強制反対の意思表示の会」の二〇〇〇年十月二八日のリードイン・スピークアウト集会での発言である。この短文を読み、自分の意見を短くコメントするというスタイル（発言者は多数）の集まりで福富さんは、こう「昭和天皇」をこきおろした。

「さて私は嫌いな人がたくさんいます。……しかしなんと言っても最も嫌いなのは昭和天皇です。嫌いと言っただけでは私の気分になってしまいますから、きちんというと、これほど無責任で、そして卑劣な人間は古今ない、その辺にいる卑劣な大臣・議員とか官僚とかはこれに比べるとチンピラです。昭和天皇ほど無責任で、卑劣な者はいない。こういう話を五分で論じよというのは残酷すぎますよね。ですから資料としてはニュー

ヨークタイムスの敗戦、終戦前後の見出し、それから皆さんが見てないでしょうけど、昭和天皇の初めてで最後の記者会見の一問一答の新聞記事（一九七五年一月一日付）を入れました」。天皇は米国報道で己の身の安全を知っており、それゆえ、ボツダム宣言の受諾へ向かったという事実を示す八月一二日の米国報道。それと自分自身の安全のために敗戦を引き延ばし、広島・長崎の無差

別殺傷爆弾攻撃があった事実を忘れたの」ととき「原爆やむを得なかった」発言である。この後、彼は天皇の「人間宣言」なるものの「朕と国民との間の紐帯は」のくだり、相互の「信頼と敬愛」で結ばれている、との言葉を引き、「もう絶句したんですから、これでやめます」と話を結んだ。

主催者発言をし、司会者としてその壇上にとどまっていた私は、決して激しく個人を断罪し断定する政治主張をすることなどなかった（そういう「急進的スタイル」を嫌っていた）彼の発言に、本当に驚いたことをよく覚えている。それは、私たちが励まされてきた「戦中派」の渡辺清さんや平井啓之さん（ともに、「わだつみ会」）の、天皇個人への非難を突き抜けて象徴天皇制それ自体の全面否定へいたる心情と論理が、のりうつったかのごときものであったのだ。

〈天皇（制）〉だけはなにがあっても許してはいけない。その時、そのメッセージは、私の胸にストンと落ちた。

「平成の代替わり」の政治過程の時間の中で亡くなった福富さんとのささやかな追悼的回想を通して、反天皇制運動の〈経験〉史は、語られるべきこと、歴史的に整理されるべきことが、まったくほり出されたままであるという実感を強く持った。この状況でこそ、それは果たされなければなるまい。それは福富さんが私たちに残した課題だ。

福富さん、楽しくそして大切な運動の時間を共有してくださって、本当にありがとうございました。

みたび

# 太田昌国の夢は夜ひらく93



ソ連の北方四島占領作戦は、米国の援助の下で実施されたという「発見」

一九四五年二月、米英ソ首脳によるヤルタ会談で、ソ連の対日参戦が決定された。同年八月九日、米軍による長崎への原爆投下と同じ日、ソ連軍は樺太南部と千島列島に投入された。さらに八月二十八日から、択捉、国後、色丹、歯舞の北方四島占領作戦が展開された。各島で日本兵の武装解除が行なわれ、九月五日、ソ連軍は四島を制圧した。

ここまでは、従来もよく知られた歴史である。八月一日直後の状況下で、スターリンが北海道占領計画なるものを提示し、これをトルーマンが拒否したことも知られている。いつ頃のことだったか、スターリンが夢想した北海道占領案を地図上で知ったことがあった。それによると、釧路と留萌を結ぶ線を引き、その北東部分をソ連が占領することになっていた。そのとき二歳で、釧路に住んでいた私は、ソ連占領下に生きることにもなり得たのだった。権謀術数の駆け引きに拠って成立している国際政治の在り方如何によっては、所与の地域に生きる（とりわけ、敗戦国や勝者に占領された国の）民草の行く末などはいかようにも翻弄され得るのだという、世界政治に対する私の基本的な視点は、この段階で定まった。二一世紀に入って四半世紀、このことが、アフガニスタン、イラク、シリア……などアラブ地域の国々で繰り返されているさまを、私たちは目撃し続けている。背後で蠢いているのが、米国とロシア

ア（旧ソ連）であることにも変わりはない。これが、人間の歴史に対する諦観をわれらが裡に育てるものなのか、もっと深く絶望を植えつけるものなのか、それとも——ここでは、問うまい。

さて、上に触れた歴史を受けて、北方四島問題を国家帰属に関わるそれとして捉えて角逐し合っているのが日露の両国家だが、そこは、近代国家成立以前には先住民の土地であったことを考えるなら、歴史哲学的にはこの契機を挟むことなく、ことを「領土問題」に凝縮して解決を図ることの「不可能性」が浮かび上がる。この点を指摘したうえで、次へ進む。日本が敗戦した一九四五年以降七三年間ものあいだ揺るぐことのなかった「ソ連対日参戦」の事実には、新たな視点が付け加えられたのは昨年末のことだった。ソ連の北方四島占領を「米国が援助し、極秘に艦船を貸与し訓練も施していた」事実が明らかにになったのだ（『北海道新聞』一七年二月三〇日朝刊）。冒頭に触れたヤルタ会談の直後から、共に連合国であった米ソは「プロジェクト・フラ」（Project Flare）と呼ばれる合同の極秘作戦を開始した。内容は以下のごとくであった。米国は四五年五〜九月、掃海艇五五隻、上陸用舟艇三〇隻、護衛艦二八隻など計一四五隻の艦船をソ連に無償貸与し、四〜八月にはソ連兵約一万二千人を米アラスカ州コールドベイ基地に集め、艦船やレーダーの習熟訓練を行なっ

た。これら一連の訓練は、四五年八〜九月の「実践」で役立てられた。四島占領作戦に参加したソ連側の艦船数は一七隻だったが、そのうち一〇隻が米国から貸与されたものだった。

つまり、ソ連の勝手なふるまいと考えられてきた北方四島の電撃的な占領作戦は、米ソをトップとする連合国の作戦であった、ということになる。こんなこともあるのか、と思えるほどの、歴史的な「一大発見」ということになる。発見者は二〇一五年米北方四島の遺産発掘・継承事業を行なっている根室振興局である。各国の資料に当たる中で、サハリン及びクリール諸島上陸作戦に参加した軍艦リストを調査した一ロシア人学者の二〇一一年度の研究が糸口になったようだ。調べてみると、米の元軍人リチャード・ラッセルが二〇〇三年に『プロジェクト・フラ』を書いて、この極秘プランの内幕を著している。これが最初の研究だとすれば、やはり真相は六〇年近くも秘されてきたということになる。

この場合は、国際関係の微妙さを口実とした「隠蔽」だったのか、よくわからぬ。時代の制約の中に生きる人間の問題意識・歴史認識の水準に帰すべき場合もある。近着の『極東書店ニュース』六四三号電子版を見るにつけても、学生時代以降半世紀間見続けて読書の指針にしてきたこの学術洋書案内に見られる内容の変化は著しい。ジェンダー研究、女性史、移民史、移民問題、少数民族、人種問題、環境問題などという書目分類は昔ならあり得なかったが、昨今は際立って冊数も多い。国際政治ゆえの「隠蔽」の力が作用しているのか、それともわが認識水準が及ばないのか、いずれにせよ、歴史にはこんなことが起こり得るのだ。

まだ真相に行き着いてはいないのではないかと、いう恐れをもって、歴史に向き合いたいものだ。

（二月三日記）

## 野次馬日誌

1月1日～1月31日

## 【1月1日】

天皇、皇族◆「新年祝賀の儀」が皇居・宮殿であり、明仁「新しい年を共に祝うことを誠に喜ばしく思います。年頭に当たり、国の発展と国民の幸せを祈ります」。宮殿「松の間」で、徳仁、雅子や秋篠宮、紀子、眞子ら皇族があいさつ。明仁、美智子が皇族と共に宮殿の各部屋を回り、安倍晋三首相や閣僚、衆参両院議長、最高裁長官らから祝賀を受ける。午後、各国の駐日大使らが宮殿を訪れ、新年のあいさつをする。

明仁、美智子◆新年に当たり、明仁が前年に詠んだ歌のうち5首、美智子が3首を、宮内庁を通じて発表し、明仁の歌には、全国植樹祭、国体、全国豊かな海づくり大会の開催地へ贈った3首が含まれると報道。

明仁退位◆大島理森・衆院議長が年頭所感を発表し、2019年4月に決まった明仁の退位に関して「国民の皆さまの敬愛と祝意が満ちあふれる中で、つつがなく行われることを期待している」。

「新年祝賀の儀」◆安倍晋三首相が、写真共有アプリ「インスタグラム」に新年のあいさつを投稿。皇居で「新年祝賀の儀」に出席する際に撮影した写真を投稿。／安倍晋三首相が妻と共に、皇居で行われた「新年祝賀の儀」に出席。

## 【1月4日】

代替わり◆菅義偉・官房長官がBSフジ番組で、2019年5月1日の新天皇即位に伴う新元号について「分かりやすく、国民から親しまれることが必要だ」。首相が複数の候補から最終的に決定し、官房長官が公表すると説明。明仁の退位や新天皇の即位の儀式に関して「過去の経験を参考にしながら、つつがなくできるように対応したい」。

皇位継承◆立憲民主党の枝野幸男代表が国会内で記者団の質問に答え、党内に皇位継承の安定に関する検討委員会を近く設置し、女性宮家創設の是非も含め議論する意向を表明。

## 【1月5日】

代替わり◆安倍晋三首相が政府与党連絡会議で、19年4月の明仁の退位と翌5月の新天皇の即位について「国民の祝福の中で、つつがなく行われるよう、今年初めから準備を一つ一つ確実に進める」。

## 【1月6日】

愛子◆宮内庁東宮職が、愛子がインフルエンザに感染したと発表。4日から、スキーを楽しむため訪れていた長野県の奥志賀高原で、高熱などの症状が出て、ホテルで東宮侍医の治療を受けながら静養していたが、熱が下がりはじ。

## 【1月7日】

新元号◆安倍晋三首相がNHK番組で、19年5月1日の新天皇即位に伴う新元号

について「平成や昭和のように、日本人の生活に深く根ざすものになければならない」と語った上で、元号公表時期は「国民生活の影響を十分考慮する」と述べたと報道。

## 【1月8日】

「慰安婦」問題◆複数の韓国メディアが、文在寅政権が旧日本軍の「従軍慰安婦」問題について、日本政府に「責任ある措置」を新たに求める方針を決めたと報じる。

在沖米軍ヘリ事故◆沖縄県読谷村の廃棄物処分場に米軍普天間飛行場（同県宜野湾市）所属のAH1攻撃ヘリコプターが不時着。

## 【1月9日】

代替わり◆政府が閣議で、19年4月30日の明仁の退位と翌5月1日の徳仁の新天皇即位を巡り、菅義偉・官房長官をトップとする準備委員会の設置を決める。首相官邸で開いた初会合で、退位の儀式や、19年秋の実施が想定される「即位の礼」などの在り方を定めた基本方針を取りまとめることを確認。菅官房長官が記者会見で、基本方針の策定時期は3月中旬になると明らかに。／宮内庁の西村泰彦次長が定例記者会見で、明仁の退位と徳仁の即位を巡る政府の準備委員会に出席した山本信一郎・宮内庁長官の発言を明らかに。宮内庁の意見として、明仁の退位の儀式と、秋篠宮が皇位継承順1位の「皇嗣」となることを示す儀式の重要性を強調したほか、「即位の礼」と「大嘗祭」の日程に余裕を持たせるよう求め、2019年秋に実施される見通しの徳仁

の即位の礼の在り方は、「昭和」から「平成」への代替わり時の考え方を踏襲するのが基本だと主張。即位後初めて行う「新嘗祭」である大嘗祭が同年11月に控えているとして、日程に配慮するよう要望し、秋篠宮が皇嗣となることを示す儀式は、皇太子になる場合の「立太子の礼」に倣うことが望ましいと伝えたというと報道。政府内で退位の儀式を「国事行為」とする案が浮上していることについて西村次長（「宮内庁の意見」）現時点で申し上げる状況にない。今後の議論の中で発言していく。

常陸宮発言記事◆宮内庁の西村泰彦次長が定例記者会見で、前年12月の皇室会議を巡り、雑誌「月刊テームス」1月号に掲載された常陸宮の発言として紹介した記事を「事実無根」と否定、テームスに口頭で抗議し、記事の撤回を求めたと明らかに。「皇室会議 常陸宮さま」たった一人の反乱」と題した記事で、常陸宮の会議での発言として「陛下は憲法を改正して制度的に辞められるようにしてほしい」と思っておられる」などと記述しており、西村次長によると、常陸宮夫妻も記事の内容を把握しているとして「会議の中で、そのような発言は一切なかった。天皇陛下下の退位に関する話で宮内庁として看過できない」。同誌の発行人佐々木重敏が共同通信の取材に「事実」は記事にある通りで内容に間違いはない。撤回には応じない。

「内奏」◆安倍晋三首相が、皇居で「内奏」。大谷直人・最高裁長官らの任命式、認証



式に出席。

# 「1月10日」

天皇、皇族◆明仁、美智子が皇居・宮殿「松の間」で、年頭に当たり、さまざまな学問の第一人者から講義を受ける「講書始の儀」に臨む。徳仁、雅子や秋篠宮、紀子ら他の皇族が出席。

「慰安婦」問題◆韓国の文在寅・大統領が、ソウルの大統領府で年頭の記者会見を行い、旧日本軍の「従軍慰安婦」問題を巡る2015年の日韓政府間合意について「日本が心から謝罪するなどして、被害者たちが許すことができた時が本当の解決だと考えている」。

# 「1月11日」

明仁、美智子◆宮内庁の山本信一郎長官が定例記者会見で、明仁、美智子が前年まで3年連続で観戦している大相撲初場所について、当年は取りやめとなったと明らかに。前年10月に日本相撲協会から招待を受け、検討していたが、元横綱日馬富士関による暴行事件などを受け、当週に入って協会から「昨今の情勢を踏まえて辞退したい」と申し入れがあったとして「両陛下も残念に思っておられるだろう」。

# 「1月12日」

天皇、皇族◆新春恒例の「歌会始の儀」が皇居・宮殿「松の間」で開かれ、明仁、美智子や徳仁、秋篠宮、紀子と眞子ら皇族が出席。雅子は見合わせる。

明仁、美智子◆3月下旬に、沖縄県を訪問することが、宮内庁への取材で分かる。27～29日の2泊3日で、那覇市を拠点と

し、日本最西端の与那国島にも初めて足を運ぶ予定で、2人が再訪を希望したと報道。

彬子◆宮内庁が、故寛仁の長女彬子が、トルコの考古学研究を支援する三笠宮記念財団の総裁に就任したと発表。就任は財団が設立された前年3月7日付と報道。

「歌会始」◆翌年の歌会始の題が「光」に決まり、宮内庁が応募要領を発表。

「慰安婦」問題◆安倍晋三首相が「慰安婦」問題でさらなる謝罪を求める文在寅・韓国大統領の新方針を拒否する考えを表明。

# 「1月13日」

明仁、美智子◆東京都文京区の印刷博物館を訪れ、月刊保育絵本「キンダーブック」の歴史を振り返る企画展「キンダーブックの90年―童画と童謡でたどる子どもたちの世界―」を鑑賞。

# 「1月15日」

明仁、美智子◆東京都港区のサントリーホールを訪れ、ポーランドのワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団のコンサートを鑑賞。

# 「1月16日」

久子、承子、絢子◆宮内庁が、故高円宮の妻久子が全日本アーチェリー連盟と日加協会の名譽総裁を退任し、長女承子が連盟、三女絢子が協会の名譽総裁に、それぞれ16日付で就任したと発表。

代替わり◆政府が、明仁の退位や新天皇即位の儀式を巡る準備委員会が9日に開いた初会合の議事概要を首相官邸ホームページで公表。委員長の前義偉・官房長官や出席した委員の意見を紹介し「憲法

との整合性、皇室の伝統に即したものであるとの二つの観点で検討を進めるべきだ」などの指摘があったとしているが、発言者名は菅官房長官の冒頭あいさつを除いて非公開だったと報道。

# 「1月17日」

明仁、美智子◆阪神大震災の発生時刻に合わせ、皇居・御所で黙とう。／宮内庁を通じて、平昌五輪に参加する日本代表選手団に金一封を贈る。

美智子◆美智子の和歌50首をドイツ語訳した歌集「その一粒に重みのありて」の出版を記念した行事がベルリンの日本大使公邸で開かれ、翻訳したボン大名誉教授の日本学者ベーター・パンツァー「この50首に皇后さまのこれまでの人生が詰まっている」。

朝鮮学校◆「神奈川朝鮮学園」（横浜市）が運営する神奈川県内の朝鮮学校5校の保護者計118人が、県が16年度から学費補助金を支給していないのは不当な差別に当たるとして、県弁護士会に人権救済を申し立てる。

# 「日の丸」

◆平昌冬季五輪の日本選手団の監督会議が東京都内で行われ、日本オリンピック委員会（JOC）の山下泰裕・選手強化本部長がカヌーの禁止薬物混入問題などスポーツ界での不祥事が続いたことを踏まえ「われわれは一個人として五輪に参加するわけではない。日本人の代表として五輪に参加する。日の丸をつける自覚、覚悟、誇りは、決して失ってはならない」とあいさつ。

「日の丸」◆平昌冬季五輪の日本選手団の

監督会議が東京都内で行われ、日本オリンピック委員会（JOC）の山下泰裕・選手強化本部長がカヌーの禁止薬物混入問題などスポーツ界での不祥事が続いたことを踏まえ「われわれは一個人として五輪に参加するわけではない。日本人の代表として五輪に参加する。日の丸をつける自覚、覚悟、誇りは、決して失ってはならない」とあいさつ。

3・11◆政府が閣議で、東日本大震災から7年を迎える3月11日午後、東京都千代田区の国立劇場で追悼式を開催することを決める。明仁、美智子は前年に続き出席せず、秋篠宮、紀子や安倍晋三首相、閣僚らが出席すると報道。

# 「1月21日」

核兵器禁止条約◆核兵器を全面的に違法化する核兵器禁止条約が国連で採択された前年7月以降、日本政府に条約への署名や批准を求める意見書が少なくとも113の地方議会でも可決され衆参両院に提出・受理されたことが、両院事務局と地方議会への取材で分かる。

# 「1月22日」

明仁◆参院本会議場で行われた第196通常国会の開会式に出席し「お言葉」を述べる。

代替わり◆安倍晋三首相が衆参両院での施政方針演説で、19年4月30日の明仁退位と、翌5月1日の新天皇即位の円滑実施に「全力を尽くす」と述べる。

改憲◆安倍晋三首相が衆参両院での施政方針演説で、憲法「改正」の早期実現へ各党に具体案を国会に提示するよう要請。



弾道ミサイル訓練◆東京都と国などが、他国から弾道ミサイルが飛来したとの想定で、文京区の東京ドーム周辺にある地下鉄駅や遊園地などで、住民ら約350人が参加し避難訓練を実施。

核搭載型米爆撃機◆航空自衛隊のF15戦闘機と米空軍の核兵器搭載可能なB52戦略爆撃機が、東シナ海上空で共同訓練したことが防衛省への取材で分かる。

米軍機トラブル◆小野寺五典・防衛相が、在日米軍の航空機やヘリコプターによる事故・トラブルが17年は25件発生し、16年の11件から2倍以上となったと明らかに。

#### 【1月23日】

美智子◆毎日放送（大阪市）が、同社が制作している教養バラエティー番組「教えてもらう前と後」で美智子の写真を使用した際、撮影時期を誤って放送したと発表。同社によると、番組は9日夜、TBS系で放送され、当時皇太子だった明仁が「ご成婚前に撮影されたお写真」と説明していたが、実際は「ご成婚」後の1963年に撮影されていたもので、視聴者の指摘で判明したとして、同社広報部「事実確認が不十分であり、関係者の

皆さまに多大なるご迷惑をお掛けしました。おわび申し上げます」。

献上ガニ◆福井県坂井市の魚問屋で、県特産の冬の味覚「越前ガニ」を、明仁、美智子や皇族に贈るため釜ゆでにする作業が行われる。1922年に始まり、戦時中などを除いて続く恒例行事で、県職員が24日に皇室へ届けると報道。

高浜原発◆稼働中の関西電力高浜原発3、4号機（福井県高浜町）が北朝鮮からミサイル攻撃を受けた場合の広域被害を訴え、大阪府高槻市の女性が2基の運転差し止めを求めた仮処分審査が、大阪地裁（森純子・裁判長）で結審。女性側は、政府がミサイル発射に備えて自衛隊の迎撃を可能とする破壊措置命令を常時発令しており、緊張状態にあると指摘、原発が攻撃されれば関西圏に影響をもたらす危険があるとして運転を止めるべきだと主張。関電側は「具体的な危険は切迫していない」と申し立ての却下を求めている。女性側の弁護士によると、地裁が年内に決定を出す方針を示したと報道。

#### 【1月24日】

秋篠宮、紀子◆2月9日に開幕する平昌冬季五輪で、東京都内で行われた日本選

手団の結団式に出席。

大逆事件◆和歌山県新宮市が、市出身で明治末期の大逆事件で処刑された医師大石誠之助（1867～1911年）を名誉市民にすることを決め、遺族代表に表彰状を贈る。

#### 【1月25日】

代替わり◆安倍晋三首相の施政方針演説に対する各党代表質問が参院本会議で行われ、自民党の吉田博美・参院幹事長が、明仁の退位や新天皇の即位に関する政府対応を質問。首相「国民の祝福の中でつがなく行われるよう、全力を尽くしていく」。

#### 【1月26日】

明仁、美智子◆皇居・宮殿で、農業や畜産業などで優れた成果を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。

東京五輪経費◆東京都が、準備が本格化する2020年東京五輪・パラリンピックの大会経費と都が進める関連事業の経費で、20年度までに約1.4兆円が必要になるとの試算を初めて公表。

改憲◆安倍晋三首相が参院本会議で、憲法「改正」に関する世論調査結果を引き合いに出し、改憲に改めて意欲を示す。

#### 【1月29日】

秋篠宮、紀子◆6月に、米ハワイを公式訪問する方向で宮内庁が検討していることが、同庁関係者への取材で分かる。滞在は約1週間、日本人がハワイに移住して今年で150周年となることを記念する式典などに参加し、あいさつする見通しと報道。

眞子◆7月にブラジルを訪問する方向で宮内庁が検討しており、現地日本人移住110周年の記念式典に臨席する予定と報道。

#### 【1月31日】

東宮女官◆宮内庁が、東宮女官安東博子の依願退官の人事を発表。

歴史認識◆自民党が、近現代の歴史を検証する「歴史を学び未来を考える本部」の会合を党本部で開き、1931年の柳条湖事件に始まる満州事変をテーマに意見交換。北九州市立大基盤教育センターの小林道彦教授が講演し、日本による中国東北部占領の経緯や当時の政治状況を説明。出席者から「満州事変を主導した」関東軍の暴走を許した背景は何か「当時の昭和天皇はどんな役割を果たしたのか」などの質問が出たと報道。



17・12・23民主主義と天皇制代替わりにあたり改めて問う  
.....

二〇一六年八月、生前退位のメッセージを発した天皇によって、これから始まる、一連の代替わりの儀式に対して、改憲に反対する人々の中からも、このことを問題視するところがある。この状況の中で天皇制が持つ意味を改めて問いたいと企画した。

私たちは継続的に天皇制の問題に取り組んできたわけではないが、自民党の改憲草案は、天皇の元首化も内容に盛り込んでおり、向こう側にとっては九条と一は、これからの日本の「国柄」を決める重要な条項であることは間違いない。講師の鶴飼哲さんは、それにプラスして、

二〇二〇年のオリンピックを問題だと指摘された。二〇二〇年のオリンピックは、新天皇のもとで改憲をした新生日本のお披露目の場のためである。そして今回の現天皇の「生前退位」は、退位を求めることによって、ヒロヒト天皇が固執したが排された天皇の発議権を

得て政治的な復権を果たしたが、もちろん、このことは憲法四条違反であると指摘された。

私の周りでも、改憲や戦争法には反対という人でも、憲法を守らないひどい安倍より今の天皇は平和主義者でまし、という意見を結構聞く。確かに個人のキャラはそうかもしれないが、天皇制は国家機構の重要なイデオロギー装置である。個人のキャラで左右されるものではなく、役割を持っている。鶴飼さんは、その役割を「思考停止の装置」「排外装置」「忘却装置」としてあると言われた。そもそもなぜ天皇制があるという素朴な疑問すら発することが憚られる状況が作られ、「国民」の枠から外れたものへの不利益などなお思い当たることは多々ある。

そして、改めて「主権」を問い直す作業が必要ではないかと指摘された。日本国民の総意による象徴天皇の規定と、「日本国民たる要件は、法律でこれを定める」とする一〇条によって「国民」の枠外に置かれる人たちがいる。一条と一〇条の隠れた対応関係こそ日本国憲法の「トロイの木馬」だと。私自身、運動の間で「国民」という言葉を使わないようにしている。まずそのことに自覚的にならないければ、天皇制問題の本質が見えないのではないかと思う。ハードルは高いが、今の状況だからこそ原則的なことを訴えていくしかない、と思っている。

(山本みはぎ／不戦へのネットワーク・名古屋)

## 反「昭和」Xデー闘争の「経験」を通して、「平成」代替わりを考える

一月四日、午後二時からピープルズプラン研究所会議室で、「『平成』代替りの政治を問う」連続講座の第三回「反昭和」Xデー闘争の「経験」を通して、「平成」代替わりを考える」が開催された。参加者は約二六人。

この連続講座は「平成天皇制代替りの政治」のプロセスを、まず正面から緻密に批判検証する「作業を通して」「ここ三年」以内の「退位・新天皇即位」の政治イベントに有効に対決」するという意図で、二ヶ月に一回のペースで一年以上連続して開催されている。

今回は、天野恵一さんが司会をし、池田五律さん・北野誉さん・国富建治さんが問題提起をするという形で行われた。

まず池田さんが「Ⅰ 反天連と出会う前」「Ⅱ 反天連との出会い」「Ⅲ 八六年「天皇在位六〇年奉祝」反対闘争」「Ⅳ 遺産と継承されなかった運動体験」「Ⅴ あの時、あまり僕が考えなかったこと」「Ⅵ 今後の六点について話された。

次に、北野さんが「私の反天皇制運動への関わり」「天皇制が『浮上』してきた時代認識」「反天皇制運動という課題の持つ意味」「実行委（共同行動）の展開」「その後」の五点について話された。

そして、国富さんが「一九七〇年代『私たち』にとつての天皇制との闘い」「一九八〇年代」「昭和」代替わりをめく

る闘いで私たちが学んだこと」の三点について話された。

最後に、天野さんが、一九六〇年代学生運動経験者や新左翼の人々が一九八〇年代中盤に取り組んでいた反天皇制運動が、反「昭和」Xデー闘争に取り組む過程で、福富節男さんなど旧「ベトナム」と平和を！市民連合」の人々や、靖国問題に取り組むキリスト者の人々、わだつみ会の平井啓之さんなど戦後民主主義の流れを汲む人々と出会い、シングルイシューで新たな共闘を広げていった経験などを話された。

当日は、三〇年前の様子がうかがえる資料も豊富に用意された。

その後の質疑応答を含め講座は三時間半に及び、今回は熱の入ったものとなった。

(田中／講座実行委員会)

## 警視庁機動隊の沖縄への派遣は違法住民訴訟 第五回口頭弁論

一月二四日、第五回口頭弁論が開かれました。数日前に東京でも大雪が降り、まだ雪が残る寒い日でしたが、傍聴席は数席のみを残してほぼ満席となりました。

一月一七日に高木弁護士から書面で「準備書面（訴えの追加的変更申立書）」と「証人申請書」を提出されており、今回の弁論では準備書面の簡単な確認と証人申請、そして原告からの意見陳述がなされました。被告側からは何の主張もありませんでした。

準備書面では、被告の「給与支出に關して、警視總監には何の権限もない」という主張に対し、「本件派遣が形式的には東京都公安委員会の決定だろうと、実質的には警視總監の決裁に基づいて本公安委員会の決定は行われ、警視總監の決裁抜きに都公安委員会の決定が行われない」と反論をしています。警視總監に責任逃れをさせるわけにはいきません。

証人申請は原告一名、沖縄から五名、資料提供協力者一名、そして警視總監二名の総勢九名です。青龍弁護士が一人ひとりを紹介し、申請の理由説明がなされました。証人がどれだけ認められるか未知数ですが、なんとか法廷が現地での機動隊の行為の違法性を問える場になりたいです。

先日、高江での機動隊による通行規制が違法だと、沖縄での国賠訴訟が勝利し、さらに、これに対し沖縄県は控訴しないと決まりました。これは私たちの裁判にも十分な追い風になるでしょう。意見陳述では、裁判所に対して司法が誠実な審議をすること、司法としての責任を果たすのだと強く訴えられました。東京地裁にも同様の誠実さを求めたいです。

この日、八回目の期日が七月二三日と決定しました。回を重ねるごとに裁判の内容が少しずつ具体的に進んでいますが、油断はできません。最後までできることをやるのみです。

次回六回目の口頭弁論（三月一四日）では、本件派遣の違法性についての現段階での主張の追加と整理がされます。次

回もぜひみなさん注目してください。

(住民訴訟原告／岩川)

## 「沖縄報道を問う」1・27シンポジウム

東京MXテレビ（以下MX）放映の「ニュース女子」で沖縄の平和市民が貶められてから、ちょうど一年が過ぎた。この間、私たち「沖縄への偏見をおおる放送をゆるさない市民有志」は、三月まで毎週、その後は隔週（または第二、第四木曜日）MX前で「訂正と謝罪を」求め

### 「学習会報告」

#### ケネス・ルオフ『紀元二千六百年』

(木村剛久訳、朝日選書、二〇一〇年)

一九三一年の満州事変に始まり、アジア・太平洋戦争へと至る戦争が日本人にとって破滅的な事態を招いたのは歴史的事実である。しかし、その戦時はずっと暗い谷間の時代だったとする理解は、果たして正しいのだろうか。著者は、そうした戦時の理解は、戦後になって定着した神話に過ぎない、と指摘する。

日中戦争の泥沼にはまり、太平洋戦争直前の一九四〇年は、皇紀二千六百年であるとして、万世一系の天皇制国家をたてえるさまざまな記念行事が繰り広げられた。帝国臣民は定時に宮城を遙拝し、皇国史を学び、出版社や新聞社の愛国歌・

て抗議活動を行ってきた。昨年末にはBPO（放送倫理・番組向上機構）も、平和運動への取材の欠如を問題にしなかったことや、侮蔑的表現について、MXの重大な放送倫理違反を指摘している。しかし訂正や謝罪はないうままだ。今回のシンポジウム「沖縄報道を問う」は、いつもの活動と同様、MXに抗議し、この様な放送を許す社会に疑問を投げかけると同時に、公共の電波においてデマが広まったときや、それにより人権侵害が起こったとき、私たち市民がどのように実践的にアプローチ出来るか、そして、今一度

#### 消費と観光のナショナリズム

作文の募集に応じ、聖地を訪れ、百貨店の催事を見に出かけた。また、皇室関連の場所や神社を拡張整備、清掃する勤務奉仕もいとわなかった。

こうした大衆参加を促したのは政府だけではなく。民間企業も祝典をビジネスチャンスと捉え、消費を促した。戦時のナショナリズムが消費を刺激し、消費主義がまたナショナリズムを煽っていた、そのさまざまな実例はとても興味深い。

帝国全土にわたる消費と観光を支えたのは近代ナショナリズムである。海外同胞も巻きこんで開催された大イベントは、帝国日本の血統による国民形成と統合の

沖縄への差別問題の本質とはなにか考える会となった。

発言順にMX問題の鍵となるようなバネリストの主張を紹介したい。まず、市民有志の川名は、電波を通して、デマやヘイトが権威付けられ、沖縄へのヘイトやデマがさらに強まっている現状を報告した。ゲストで元MX社員、現Ony Brandの白石からは、例えば放送局が経営難の時、企業や制作会社がジャーナリスト精神や倫理を意に介さないような番組を持ち込むといった、放送が抱える現代的な問題などが紹介された。この構造は

試みであつたが、うまくいかなかったことも描かれている。

また本書は、一九四〇年を頂点とする大衆消費社会の到来に焦点を当てながら、同時代のドイツ・ナチズムやイタリア・ファシズムとよく似た政治体制が日本でも成り立っていた、とする。つまり、生活が制限され、自由もなかった暗い谷間であつたとの捉え方と、丸山眞男の、日本には「下からのファシズム」がなく「上からの崩壊的なファシズム」化が進んだだけ、とする捉え方も批判する。戦時日本の大衆的行動主義を軽視している、と。

議論では、著者が戦時日本もファシズムと把握しようとする整理に対して、ドイツやイタリアでファシズムが成立したのは共産主義革命を潰すための反革命であり、日本にはそうした現実性はなかつた。

例えば国民投票などのプロパガンダに容易に利用されうるという指摘もあった。フリージャーナリストの安田は、MX問題は表現の自由といった高度な問題ではなく、ただ誹謗中傷、レイシズムの問題で、どう言い訳しても正当化されないと述べた。また、沖縄の海が、文化が好きだから差別する気はないというのは詭弁だとも語り、会場から賛同の拍手が上がった。最後に、はるばる沖縄から駆けつけた泰は、デマで傷ついた沖縄の人々の生々しい胸のうちを語った。泰は本業は医療従事者であり、運動参加も命を守るとい

た事実も見落としてはならない、との指摘がされた。また、ナチスが行った暴虐が明らかにされた戦後においてもなお、「あの時代は良かった」という回想が少なからぬ体験者がいる事実を含め、ナチス・ドイツを研究した池田浩士さんの仕事や、戦時下日本において、家の束縛からの解放感を実感として持つ女性たちが戦争協力していた歴史を分析した加納実紀代さんの女性史研究が、先行研究としてあることも指摘された。本書は、戦時日本像を捉え返すだけでなく、現代のファシズムを考えるうえでも、さまざまな材料を与えてくれており、議論は尽きなかった。

次回は、二月二七日（火）。テキストは、『皇紀・万博・オリンピック―皇室ブランドと経済発展』古川隆久（中公新書／一九九八）。

(川合浩二)



思いが通底している。そのような運動が救急車を止めたM・Xが報じたことを許せないとする等の言葉から、現場に立つ当事者としての決意の重みを感じた。(※敬称略)

(Mel Yoshida)

## ハルノ日誌

1月4日(木) ● 辺野古実防衛省抗議行動

1月13日(土) ● 日雇全協総決起集会

● 移民国家・アメリカにおけるトランプの暴走と反レイシズムの闘い Part 2  
1月14日(日) ● 「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第3回 反「昭和」Xデー闘争の〈経験〉を通して、「平成」代替わりを考える(集会の真相参照)

1月20日(土) ● 鵜飼哲最終ゼミ「原理主義とは何か」以後  
1月21日(日) ● 上原成信さんお別れ会  
1月24日(水) ● 警視庁機動隊沖縄派遣は違法 住民訴訟第5回口頭弁論(集会の真相参照)

1月27日(土) ● 沖縄報道を問うシンポジウム(集会の真相参照)  
1月28日(日) ● 辺野古実新宿デモ  
2月3日(土) ● 「日の丸・君が代」の強制をはね返す2・3 神奈川集会和デモ

## 集会情報 INFORMATION

開催中〜7月末予定 ● 日本人「慰安婦」の沈黙  
13時〜18時(月・火・休日休館) / W A M・私たちの戦争と平和資料館(地

下鉄早稲田駅ほか) / 連絡先・同館(03-3202-4633)

2月10日(土) ● リュウセイオー龍 Solo Dance 僕らの花 / 未来都市

18時30分開場 / プラン・B(地下鉄中野富士見町橋駅) / リュウセイオー龍 / 問い合わせ: (080-5375-2058 龍之陣)

2月11日(日) ● 2・11反「紀元節」行動 明治150年〜近代天皇制を問う  
13時30分 / 全水道会館4F大会議室

(JRほか水道橋駅) / 太田昌国 / 主催: 「代替わり」と近代天皇制150年を問う! 反「紀元節」2・11行動(090-3480-263)

● 「紀元節(建国記念の日)」を考える京都集会 憲法不在の天皇「生前退位」

14時 / 日本基督教団洛陽教会地下ホール / 横田耕一 / 主催: 日本基督教団京都教区「教区と社会」特設委員会ほか  
2月12日(月) ● 国体って何? オリンピックって必要? 2019茨城国体とナショナルリズムを問う

14時 / つくば市市園交流センター大会議室(TXつくば駅) / 宮崎俊郎 / 主催: 戦時下の現在を考える講座(090-8441-1457 加藤)

2月13日(火)〜18日(日) ● 万人受けはあやし〜時代を戯画いた絵師、貝原浩  
12時〜19時(最終日は17時まで) / ギャラリーヒルゲート(地下鉄京都市役所駅ほか) / ギャラリートリックあり / 主催: 貝原浩の仕事の会(090-2904-2518)

2月18日(日) ● 沖縄・大浦湾に軍事基地は造れない! 土木技師が語る、辺野古埋立工事の今  
14時45分開場 / スペースたんぽぽ(JR水道駅ほか) / 主催: 沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック(090-3910-4140)

2月22日(木) ● 原発被ばく労災損害賠償裁判第6回口頭弁論  
14時 / (13時よりアピール行動) / 東京地方裁判所(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

2月24日(土) ● 大軍拡と基地強化にNO! 防衛省デモ&集会  
デモ: 15時15分集合・外濠公園(JR市ヶ谷駅) / 集会: 18時15分開場・文京シビックセンター3F / 田村順玄 / 主催: 同

アクション2017(03-3961-0212)有事立法・治安弾圧を許すな! 北部集会実行委員会ほか  
● 止めよう! 安倍政権が煽る米朝戦争の危機

18時開場 / 文京区民センター3F(地下鉄春日駅) / 半田滋 / 主催: 3・1独立運動99周年集会実行委員会(070-6997-2346 日韓ネット)

3月11日(日) ● 事故から7年 追悼と東電抗議  
13時30分 / 東京電力本店前 / 呼びかけ: 経産省前テントひろば(070-6473-1947)ほか

3月14日(水) ● 警視庁機動隊沖縄派遣は違法 住民訴訟第6回口頭弁論  
11時30分 / (10時30分よりアピール行動) / 東京地方裁判所(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

3月16日(水) ● 第3回靖国連続学習会「近代天皇制と宗教」  
18時30分 / エル大阪606号(地下鉄天満橋駅ほか) / 近藤俊太郎 / 主催: 安倍首相靖国神社参拝違憲訴訟の会・関西(Fax: 06-7771-4925)

3月25日(日) ● 「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第4回 明治150年式典・キャンペーンと「生前退位」

13時30分開場 / ピープルズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 太田昌国・伊藤晃・天野恵一 / 主催: ピープルズ・プラン研究所(03-6245756)

3月31日(土) ● アンダーコントロール? 復興? 3・11と「復興五輪」  
13時15分開場 / 文京区民センター2A / 小出裕章・佐藤和良 / 主催: 「2020オリンピック災害」おことわり連絡会(080-5652-0270)

● 突然思いだすわずかなタンス貯金。やつぽー! でも、それはまた思いつく楽しみのためにこつておく(木寛)

● 友人のお宅訪問。受け継がれたこちららはステキな本物の筆筒がいっぱい。家具好きにはたまらない一時。(鯉)

● 魔法はとうとう使えるようになった。手に踊れたことがない(編蝠)。

● シャル・ウィー・タンス?(猿)  
● 本日の作業、熊さんは出張でした。他の皆さんも、お疲れさま。

Q... 神田川